

に興味を持ったのはこの豊かな自然環境のためです。身のまわりの自然が年々減っていくのではないかと考えたのが始まりでした。実際、私の住んでいる地域でも、自然は減っているのです。木が切り倒されたり、川の水が濁ったり、そういった環境破壊により、私のまわりの自然が減っていくのは嫌だと思いました。

環境問題について知っていく中で、環境破壊は人間の生活をよくするために起こっているのだから、人間の手で戻さなければならぬと思いました。少しずつ環境について理解していった頃出会った本、それが「木を植えた男」でした。私はこの本を初めて読んだ時、内容が難しくあまり理解できませんでした。しかし、たった一人で荒れ果てた地に緑を戻した老人はすごいと感じたことを覚えています。今、中学三年になり読み返してみると、初めて読んだ時とはまた違う視点で読むことができていると思います。

その老人は、だれに頼まれたわけでもないのに木を植えました。老人は自分の努

力が将来、土地とそこに住む人々の役に立つことを知っていたのです。荒れ果てた土地で、だれもやろうとしなかったことをたった一人でやりとげたのです。老人が木を植えたことにより、森は生き返り、枯れていた川は再び流れ始めました。だれも住んでいなかった村にも、たくさんでも、川に水が戻り、村に人々が住めるようになったのが老人のおかげだということ、だれ一人として知りませんでした。私は、老人のことをかわいそうだと思いました。全ては老人のおかげなのに、老人は皆から感謝されるべきだと思いました。しかし、老人はそんなことは考えていなかったのだと思います。きっと、地に緑が戻るのを見るだけで老人は幸福だったのだでしょう。

老人は毎日、百もの種を植えました。十万個の種を植えても、芽を出したのは二万個。その半分近くが動物にかじられ、だめになるだろうと老人は考えていました。十万個のうち無事に育つのはた

った一万個。そう考えてしまいますが、荒れ果てた土地に一万本の木が育つのはすごいと思います。老人は木がいくらかだめになってしまっても種を植え続けました。育てている木がだめになってしまっても、一番つらいのは老人なのに、だめになるとわかっていて植え続けるなんて、私にはないパワーを老人に感じました。

私は老人のように、たった一人で荒れ果てた土地に緑を戻そうと考え、実行する勇氣はありません。でも、森林が毎日のように切られ、焼かれて減っていったら、それは、とても悲しいことだと思います。人間の生活のためだけに利用されるなんて、許されることではありません。この状態がこのまま続けば、確実に地球は死んでしまいます。水も空気も作ることはできなくなってしまうでしょう。そんな未来はだれも望んでいないと思います。みんなが幸せで平和な世界、それが一番ではないでしょうか。私も老人が考えたように、ただ、何もせずのんびり暮らすよりは、何かのためにやる仕事をしたい、

そう思います。豊かな自然、そして、地球を残すために、私ができることをしていきたいと思います。一人の人ができることは、老人のように大きなことではないかもしれませんが、一人一人が少しずつやることで、一つの大きなことになると思います。私は、私のできることをすればいい。私にできることが私にしかできないことになるかもしれない。そして、それが何かの、だれかの役に立つことができるのなら、それ以上にうれしいことはないのではないのでしょうか。

「ナイフ」を読んで

川根高校一年 橋本祐未



この作品には五編の短編が収録されている。表現や視点